

■復興への強い思い ～岩手県宮ほ場整備事業 小友地区～

気仙川土地改良区 熊谷研理事長、和泉事務局長  
(聞き手：施設資源領域長 毛利栄征、H23.10.12)

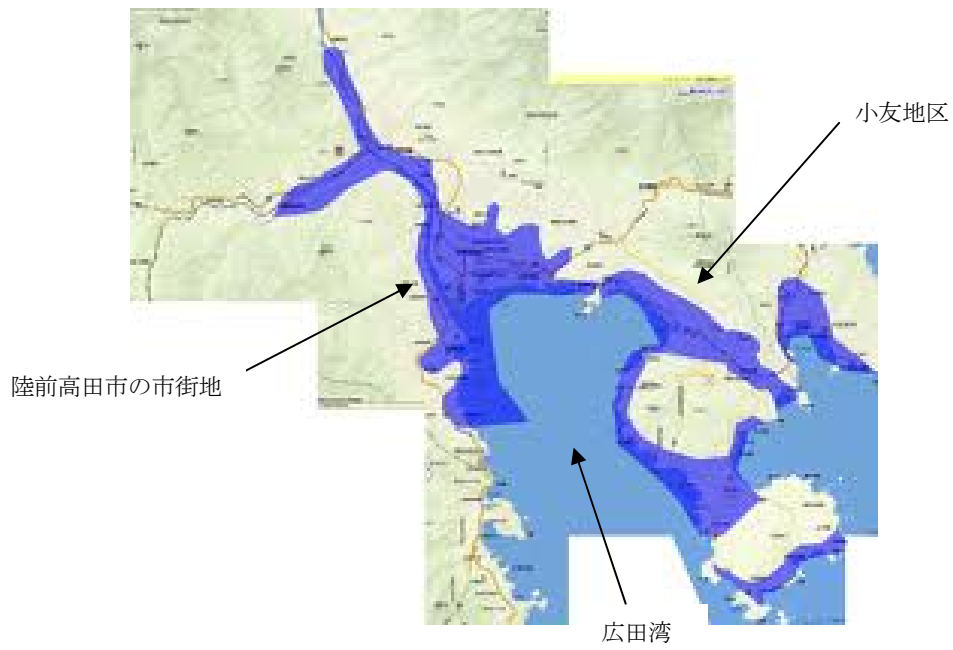
3.11に発生した大津波は、南側に開いた広田湾から侵入し、陸前高田市の市街地から、その東側に位置する小友地区を同時に襲った。当地区の西側から遡上した津波は、堤防を乗り越え地区内の農地や住宅等を跡形もなく飲み込んだ。そして、写真に示すように、地区内の一段高いアップルロードからの景色は一面のがれきで埋め尽くされ、農地の片鱗も見ることができない惨状だった。

海岸堤防の消失と地盤沈下で、農地は未だ冠水状態にあり、復旧のめどは立っていないが、ガレキの集積はわずかながら進んできており、仮設の海岸堤防が築かれるなど、復興に向けた胎動を感じ始めている。仮設堤防からほど近い海には、養殖筏の影も遠目に確認することができるなど、地域の再建に向けた動きが形を成そうとしている。

農業用水不足で長く苦勞した小友地区は、再び農地に灌漑用水を導き、農業をしっかりと再生したいという思いが強い。幸いにも（水源の）気仙川からの取水ラインは被害も軽微であることから、被災したため池と農地、地区内の灌漑施設の早期復旧に希望をつないでいる。

土地区画整理によって農地を集約し、水稻だけでなく野菜などの作物についての栽培にもチャレンジするなどの構想を描いている。既に会員の中には、津波被害のあった農地を利用して、水稻、トウモロコシ、豆、ネギ、大根、トマトなどの栽培に取り組むなど復興に向けた明るい兆しが見えてきている。

特に、小友地区にとって中山間地の農業をしっかりと振興することが重要で、溪流や水路を利用した小水力発電による電照菊などのハウス経営や、地区の電力基地としての利用などの新しい技術の導入による地域復興を進めたい。地下灌漑の技術や水車によるマイクロ発電など、直ぐにでも導入したい技術もある。私たちの構想が実現するように、行政だけでなく、研究機関にも支援いただけると有難い。



▲陸前高田市周辺の津波浸水範囲（青色着色部）



▲アップルロードから海岸堤防の状況（3月31日）



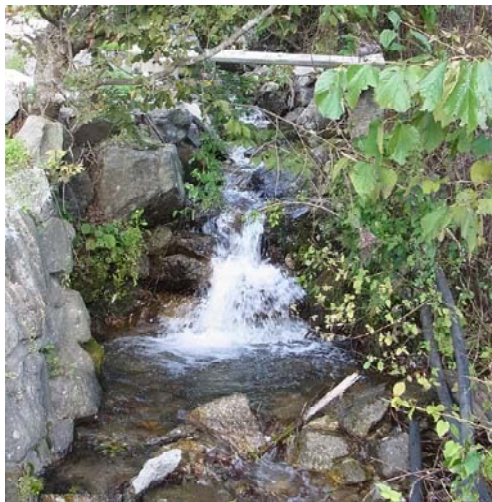
▲気仙川土地改良区の方々（右から二人目が熊谷理事長）



▲右端から養殖筏、決壊した堤防の跡、仮設堤防、湛水した農地へと続く



▲右端が仮設の海岸堤防 農地にガレキを集積、湛水状態が続く



▲小水力発電の導入を考えている溪流